

秀吉と花見文化

お花見をバズらせた秀吉

春が近づくと、日本中が心待ちにする桜。開花予報に胸を膨らませながら、人々は毎年、今年の桜を楽しみにしています。

天下統一を果たした安土桃山時代の武将、豊臣秀吉は人生で二度の大きな桜のお花見をしました。それが「吉野の花見」と「醍醐の花見」です。これが民衆に「お花見」という行事を印象づけ、その後に広まるきっかけの一つとなりました。



京都の神泉苑：日本初の桜のお花見が嵯峨天皇によって行われた。
今も季節ごとに様々な催しが開かれている。出典 <https://www.shinsen-en.org/>

桜と日本人

日本人はいつ頃から、桜を好きだったのでしょうか。農耕民族であった日本人の祖先にとって、もともと桜の木は眺めて楽しむ花ではなく、春を呼ぶ稲作の神様でした。冬の終わりに山から神様が下りてきて木に花が咲き、そろそろ田植えの時期だと教えてくれる。桜はそんな木だったのです。

奈良・平安時代になると、桜の美しさが和歌に詠まれるようになり、す。蕾がふくらみ、花が咲き、花びらが吹雪のように散る様子は、命の儚さにも喩えられ、日本人の哲学と深く関わってきました。

日本最初の桜の花見とは？

日本で最初の「桜の花見」の記録は、平安時代の『日本後紀』にあります。嵯峨天皇が八十二年に京都の神泉苑で行った「花宴の節」、これが歴史に残る最初の桜の花見とされています。優雅な「花宴」は、それ以降は平安時代の宮中行事となり『源氏物語』にも描かれました。

男達が集結！「吉野の花見」

波乱に満ちた時代の中、秀吉は天下統一を成し遂げると、五十八歳の時に大規模な「吉野の花見」を行います。徳川家康、伊達政宗、前田利家など有名な武将をはじめとして、五千人もの人々を引き連れた賑やかな花見でした。

「吉野の花見」は五日間もかけて開催され、仮装大会・能楽・歌会・茶湯など大変な盛り上がりでした。歌会で秀吉と武将たちが桜を詠んだ和歌が、今でも残っています。

女達の豪華絢爛「醍醐の花見」

その四年後、今度は秀吉は「醍醐の花見」を計画します。秀吉の側近で五奉行のひとりである前田玄以を責任者に、吉野や近江など畿内各地から七百年の桜を醍醐寺に移植し、建物も修理して準備しました。

今回は千三百人の花見ですが、男性は警備などの者を除けば、秀吉と息子の秀頼と親友の前田利家のみ。奥様方をはじめとして女性が主役の華やかな花見で、秀吉は全ての女たちに着物を三着ずつ用意し、お色直しを二回させました。現代の価値に換算すると、それは約四〇億円にも相当する豪華さだったそうです。

秀吉の花見は、莫大な予算を使った公共事業だった

そして「次は秋に紅葉狩りだな」と秀吉は言いました。しかしその願いは叶うことなく、秀吉はこの花見の五ヶ月後に亡くなっています。

「醍醐の花見」の前に、秀吉が前田玄以に「京都の様子はどうか」と尋ねた話が『室町殿物語』という当時の記録に載っています。

玄以が「人々は繁盛しているようで行楽を楽しんでおります」と答えると、秀吉は首を横に振りました。「違う。それは仕事がなく暇なのだ、このままでは京都は衰える」そしてこう言いました。

「どうにかして活気を起こしたいのだが、醍醐で花見をするのはどうだろうか。城にこもっている女たちに気晴らしをさせよう。そして大名たちには警備や工事の仕事を与える。新しい衣装や必要な物を、全て華やかに整えさせるように命じよ」



《豊臣秀吉像》(部分) 高台寺蔵

History

- | | |
|------|---|
| 1537 | 尾張国（愛知県）で生まれる |
| 1554 | 18歳 織田信長に仕える |
| 1561 | 24歳 わね（高台院）と恋愛結婚 |
| 1573 | 36歳 羽柴秀吉に改名 |
| 1582 | 45歳 本能寺の変の直後、明智光秀を討つ |
| 1585 | 48歳 関白となる |
| 1586 | 49歳 豊臣の姓を賜る |
| 1590 | 53歳 小田原攻めで北条氏を倒し、天下統一を果たす |
| 1591 | 54歳 2月、弟の秀長が病没
4月、千利休に切腹を命ず
12月、秀次に関白職を譲り、太閤となる |
| 1592 | 55歳 朝鮮へ出兵（文禄の役） |
| 1593 | 56歳 側室 茶々（淀殿）に秀頼が生まれる |
| 1594 | 58歳 吉野の花見✳ |
| 1595 | 59歳 元後継者の甥、秀次を謀反の疑いで切腹に追込む |
| 1598 | 62歳 3月、醍醐寺に七百年の桜を移植を命令
4月、醍醐の花見✳
9月、伏見城にて没す |

さらに秀吉は、この花見の様子を一般の民衆が気軽に見物できるようにとの法令も出していました。「醍醐の花見」は織物産業や宿泊施設、大工職人や飲食・流通・警備に至るまで需要を生み出す、前代未聞の公共事業であり、日本史上最大級の体験型経済イベントでした。

（参考資料『室町殿物語』（東洋文庫）
梶村長教 笹川祥生校注）



醍醐の花見：「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている醍醐寺。国宝の五重塔は創建当時から残っており、京都府下最古の木造建造物である。

鎌倉・室町時代には武士たちにも花見が広まります。そして安土桃山時代に秀吉の「吉野の花見」と「醍醐の花見」が行われ、その豪華さから人々の話題の的になりました。江戸時代になると桜は川沿いに植えられ、桜並木が登場します。これは幕府の政策で、洪水を防ぐ工事の

代わりに桜を植えて、見物客に川岸を踏み固めさせようという計画でした。幕府の思惑通り、人々は桜の下で散歩や宴会をするようになり、その様子は現代の「お花見」に近い形になりました。桜の花を愛し、また宴会なども楽しむ日本人の心は、こうして育まれていきます。



吉野の花見：吉水神社からみた吉野の桜。秀吉もここから眺め「一目千本」と称賛した。
吉野山の桜は、下千本から中千本、上千本、奥千本へと順番に咲き進んでいくので、桜を長い期間楽しめる。